



[研究ノート]

『グローバル研究』

No.2(2015)113-120

*Glocal
Studies*

歴史学におけるグローバルな視座

木 畑 洋 一

成城大学法学部, 東京大学名誉教授

kbt38@seiyo.ac.jp

(受理: 2015年1月27日, 採択: 2015年1月29日)

グローバル研究というものとは試行錯誤の段階にある。グローバル化とローカル化が同時かつ相互に影響を及ぼしながら進行していく現象としてのグローバル化が現代社会のありようを特徴づけている, という作業仮説の上に立って進められる成城大学グローバル研究センターの共同研究の一環として, 歴史学の立場からグローバル化に迫るとするとどのようなことが問題になるか, 以下はそれについての予備的考察である。

1 グローバル・ヒストリーとローカル・ヒストリー

「歴史学におけるグローバルな視座」について論じるために, グローバル・ヒストリーという研究潮流に示される「歴史学におけるグローバルな視座」とローカル・ヒストリー研究が立脚する「歴史学におけるローカルな視座」のそれぞれについて, まず考えてみたい。

この内グローバル・ヒストリーという言葉がよく使われるようになったのは, 1990年代のことである。この言葉をタイトルに含む本は, アメリカ合衆国ですでに1960年代から出されてきていたが, それが目立ちはじめたのは, 1990年代以降, とりわけ90年代後半以降のことである。それはグローバリゼーションという言葉が人口に膾炙するようになった状況と, 軌を一にしていた。

そして最近ではグローバル・ヒストリーばかりであるといってもよい状況が現出している。日本でも, 水島司が『グローバル・ヒストリーの挑戦』(山川出版社, 2008年)を編集し, 『グローバル・ヒストリー入門』(山川出版社, 2010年)を執筆したあたりから, タイトルにその言葉を冠した書物が出版されはじめた。とりわけ, 大阪大学の秋田茂を中心とする研究者グループの活躍はめざましく, 秋田茂・桃木至朗編『グローバルヒストリーと帝国』(大阪大学出版会, 2013年)や秋田茂編『アジアからみたグローバルヒストリー』(ミネルヴァ書房, 2013年)など, 研究成果が続々と世に問われている。

このグローバル・ヒストリーの特徴については, 水島司があげる次の5点がよく引かれ

る¹⁾。

- 1) 扱う時間の長さ：従来は考古学の範囲であった有史以前の人類の誕生から現在までを扱い、場合によっては宇宙の誕生までもが対象に含まれる。
- 2) 対象となる空間の広さ：ユーラシア大陸やインド洋世界というように、陸域、海域全体の構造や動きを問題とすることが多い。
- 3) ヨーロッパ世界の相対化、あるいはヨーロッパが主導的役割をはたした近代以降の歴史の相対化：ヨーロッパの歴史的役割や先進性の意味が再検討され、従来重視されてこなかった非ヨーロッパ世界の歴史やそこでの歴史発展のあり方が重視される。
- 4) 地域比較に加え、諸地域間の相互連関、相互の影響の重視：モノや制度を通じて諸地域が相互にどのように連関した歴史的動きを示したかという点が重視される。
- 5) 新たな対象、テーマ：従来は戦争、政治、経済活動、宗教、文化などが主なテーマであったのに対し、疫病、環境、人口、生活水準など、日常に近く、しかし社会全体や歴史変動のあり方全般に関する重要な問題が取り込まれる。

この水島の議論にみられるように、これまでの歴史研究で意識的にせよ無意識のうちにせよ中心にすえられることが多かったヨーロッパを相対化して（ヨーロッパ中心史観批判）、対象とする時間や空間を広げつつ、地球上で生きる人間に関わる多様なテーマを検討しているとするのが、グローバル・ヒストリーのねらいであるといつてよいであろう。

ここで一つ注意しておくべき点は、従来の世界史研究のなかにも、この5点に通底するような方向性を指向してきた仕事があったことである。第二次世界大戦後の日本における世界史研究を牽引した上原専禄や上原の後継者ともいえる吉田悟郎の仕事が思い浮かぶ²⁾。ただ、1990年代以降、このような課題がより意識的、積極的に追求されるようになったことは確かである。

一方、それぞれの地域（ローカリティ）に密着した歴史研究（ローカル・ヒストリー）は、営々として続けられてきた。『岩波講座日本通史』の別巻2は「地域史研究の現状と課題」にあてられているが、そこで総論的な議論を行った木村礎は、「所定地域内における豊かな具体的細部についての関心」に発する研究の軌跡を、江戸時代の地誌から論じはじめている。近代に関しては、柳田國男などの民俗学研究と密接に結びついた「郷土史」研究が戦前に盛んになったこと、戦後になるとこの「郷土史」を視野が狭く「非科学的」と批判する形で「地方史」という流れが起こってきたこと、さらに1970年前後から「地方史」は中央に対する地方の従属性という語感を強くもちすぎているとして「地域史」という考え方が出現してきたこと、を紹介している³⁾。

注目すべきは、地域というものについての議論もまた、1990年代に新たな活性化をみせたことである。今触れた『岩波講座日本通史』別巻2が1990年代半ばに出されたこともそれを示していたし、90年代後半には、「地域の世界史」と銘打ったシリーズが公刊された⁴⁾。また日本を代表する歴史学会の一つである歴史科学協議会は90年代末に二度にわたって年次大会のテーマとして「歴史の方法としての地域」を掲げた。こうした議論のなかで問題と

される地域は、地理的に固定され同定されるものには限られず（もちろんそのような具体的・地理的イメージと結びついた地域が、多くの場合歴史研究の対象となることは事実であるが）、歴史家の課題意識に応じて設定されるもの（たとえば地理的に離れたいくつかの場所が同じ課題に直面することを通じて一つの地域として考えられる場合など）であると考えられた⁵⁾。

こうして、1990年代以降、グローバル・ヒストリーの台頭と、ローカル・ヒストリーにおける地域についての新たな検討が進んできたのである。

2 ナショナル・ヒストリーの相対化

この動きのなかで、グローバルの側からもローカルの側からも改めて問題とされた歴史学の流れが、ナショナル・ヒストリー（国民史、国家史）である。

ナショナル・ヒストリーは、近代歴史学の王道であったといつてよい。近代歴史学は19世紀ヨーロッパにおいて発展をとげ、ヨーロッパの知的・文化的影響力拡大の重要な部分として世界に広がっていったが、それはヨーロッパで国民国家体制が展開し世界に拡大する過程と重なりあっていた。歴史家自身が属する国をあつかう自国史であれ、自国以外の外国を扱う外国史であれ、歴史研究のさまざまな視点が結局のところは基軸としてのナショナル・ヒストリーに収れんしていくなかで、歴史学は国民国家の形成と展開を支えていく有力な手段となったのである。

そのようなナショナル・ヒストリーは、国家や国民それ自体を直接の対象としない場合でも、歴史研究において圧倒的な重みをもった。

先に紹介した水島司はグローバル・ヒストリーの新しさを強調するなかで、「一国史を相対化すべき役割の世界史も、しばしば自国と周辺地域の国民国家史の寄せ集めである。」と記したことがある⁶⁾。従来の世界史がすべてそうであったと言い切ってしまうことはできないものの、自国史を重視しつつ、さまざまなナショナル・ヒストリーを並列させていくことで世界史を描こうとする傾向は確かに存在したのである。

一方ローカル・ヒストリーの方も、地方・地域についての議論がナショナルな枠組みに回収されていくことが多かった。1950年に設立された日本での地方史研究の代表的組織である地方史研究協議会の会則に、「日本史研究の基礎である地方史研究を推進することを目的とする」と記されているように、日本におけるローカル・ヒストリーは日本史というナショナル・ヒストリーと密着していたのである。

このように、世界を問題とし、地方・地域を問題とする場合でも、ナショナル・ヒストリーを媒介とする研究、ナショナル・ヒストリーに収れんする研究が、長く歴史学の支配的な枠組みとなってきたといえよう。筆者は後述するように、グローバル化の波のなかでも国民国家の意味と役割は依然として大きく、その状態はこれからも長く続いていくと考えているし、国民国家のあり方に関わるナショナル・ヒストリーの重要性は決して軽視すべきではないと思っているが、ナショナル・ヒストリーを基軸とするこのような歴史像が相

対化されるべきであることは確かである。グローバルな視座とローカルな視座を結びつけるグローバルな視座は、それにとってきわめて有効なのである。

3 グローバルとローカルを結ぶ

グローバルな視座とローカルな視座をいかに結びつけるか、まずは本項でそれについての方法的な議論をいくつか紹介した上で、次項で具体的な研究の例をとりあげてみたい。

水島司は、先にあげたグローバル・ヒストリーの5点の特徴の内、第2点目である対象の空間的広がりについて、それは必ずしも広い空間というわけではなく、「一国史と呼ばれるような一つの国に限定された分析で終始することではなく、たとえ小さな地域を事例として取り上げたとしても、より広域の諸関係のなかに事例を位置づけるということが意図される。」⁷⁾と付け加えている。ローカルと表現されるような小さな地域であっても、それ自身がグローバル・ヒストリーの対象になるという主張である。

また、現在グローバル・ヒストリーとして提示されている枠組みは従来の世界史研究のなかでも十分みられたとする南塚信吾は、そうした世界史の視角について以下のように述べる。「まず、地域から出発する方法があります。それにもいろいろありますが、いずれも国民国家という枠組みを「相対化」して、国民国家の並列としてではない世界史を考えようという志向をもっています。ドブロヴニクや沖縄や飯田などミクロな地域から世界史を展望しようとする試み、東欧や東南アジアやラテンアメリカといったマクロな地域で世界史を構成しようとする企画、そして最近では、大西洋世界や地中海世界やユーラシアやインド洋世界といった「メガ地域」を構想する方向があります。」⁸⁾ミクロな地域として、クロアチアの都市ドブロヴニクや日本の飯田地方（これらはいずれも南塚自身が関係している地域である）、さらには沖縄が例としてあげてあるが、これがより小さな地域についてもあてはまる議論として提示されていることはいうまでもない。

水島や南塚の議論に見られるのは、小さな地域についての考察を、その地域のみにとどめてしまうのではなく、また従来一般的であったようにナショナルなレベルに収れんさせるのではなく、そこから広くグローバルな問題を考えていこうとする姿勢である。2011年にオクスフォード大学に設置された The Oxford Centre for Global History は、研究対象の一つとして、「グローバルな文脈でみた地域 (region) の歴史、相互に交錯するローカルな社会の研究」をあげているが、これもそのような姿勢を示したものとといえるであろう⁹⁾。

そもそも、グローブにせよ世界にせよ、それを構成する個々の地域の集積に他ならない。地域はさまざまな形をとり多様な規模をもつが、そうした地域の変動なくしてグローバルな変化というものも起こりえない。グローバル・ヒストリーであれ世界史であれ、ローカル・ヒストリーの刻印を常に帯びながら動いているのである¹⁰⁾。そうした意味で、グローバル・ヒストリーはローカル・ヒストリーという基盤から切り離しては論じ難いし、ローカル・ヒストリーの方はグローバルな展望につながることによって新たな息吹をみせることになる。

そのような問題意識を明示的に示した共同研究に、河西英通、浪川健治、M. ウィリア

ム・スティー爾編『ローカルヒストリーからグローバルヒストリーへ』という本がある¹¹⁾。これがめざしているのは、「それぞれが研究対象とする地域空間を互いに相対化しながら、よりひろく世界史の新たな獲得の仕方、世界の新たな結合の展望として、地域史＝地域歴史学を提起すること」である。彼らはそうすることによって「新しい地域史、新しい歴史学の誕生」を促そうとしている。

グローバルとローカルを結ぶ道は、こうして、グローバル・ヒストリーがローカル・ヒストリーのなかに発現し、また逆にローカル・ヒストリーがグローバル・ヒストリーのなかに発現するという双方向性を追求していくところに見出されると考えられるが、それに際して一つ注意しておきたいことがある。前項で触れたナショナル・ヒストリーの位置づけである。グローバル・ヒストリーに関する議論やグローバルとローカルの関係についての議論がともするとナショナル・ヒストリーについて全く消極的に論じがちなこと、筆者としては疑問を覚えるのである。グローバリゼーションがさらに進展していったとしても、近い将来に国民国家の役割がなくなるとは考えられない。国民国家というまとまり、ナショナルなレベルがもつ意味は、消えていくことはないのである。グローバルとローカルといっても、それは明確な二極をなすものではなく、非常に多様なスペクトラムがそこには存在するのであり、ナショナルなレベルに焦点をあてたナショナル・ヒストリーの有用性、重要性を否定してしまうことは、ナショナル・ヒストリーを聖化することと同様の過ちに陥ることになる。秋田茂たちは、グローバル・ヒストリーを推進するにあたって、グローバル、リージョナル、ナショナル、ローカルという「四層構造」論を提唱したが¹²⁾、筆者もこのあたりが妥当な枠組みではないかと思っている¹³⁾。

4 グローカルな歴史叙述に向けて

次に、このようなグローカルな視座に関わる具体的な歴史研究の例を、いくつか紹介してみたい。もとより、グローバルとローカルが交錯する問題はいくらでもあるとあってよく、以下は筆者自身の研究をも含むごくわずかの例である。

最初に取り上げるのは、そうした視座をきわめて強く意識した研究の例である。アメリカ合衆国のニューヨーク州ロングアイランドにあるストーニー・ブルック大学には、Center for Global and Local History というセンターが存在する。2003年に作られたこのセンターは、地球と人類の相互依存性を強調し、ローカルな文化とグローバルな科学技術文明の間の相互作用に重点を置く研究をめざしている。センター創設に際して中心的役割を演じた科学史家のヴォルフ・シェイファーが、そのような視角からの研究例として、以下のような内容の「ロングアイランド：グローバル、ナショナル、そしてローカル」という論文を書いているので、まずそれを紹介しよう。

シェイファーがこの論文で取り上げているのは、ドイツからアメリカ合衆国に亡命し、ロングアイランドに居をかまえたアルバート・アインシュタインが、1939年8月2日にフランクリン・ローズヴェルト大統領に宛てて書いた、ナチス・ドイツがきわめて強力な兵器を

所有することになるかもしれないと警告する内容の、一通の書簡である。核兵器の歴史のなかではよく知られたこの手紙を、シェイファーはグローバル・ヒストリー、ナショナル・ヒストリー、ローカル・ヒストリーという三つのレベルで検討する。まずグローバルなレベルでは、それが世界を揺るがすことになる核兵器の製造につながっていったという科学および政治の国際的な領域での意味が指摘される。次いでナショナルなレベルでは、それがドイツではなくアメリカ合衆国での核開発に結びついたという点に注意が向けられる。さらにローカル・ヒストリーとのつながりでは、アインシュタインが他ならぬロングアイランドに住んでいてそこからその書簡を発送したことの意味が、その地のユダヤ人商人であったデイヴィッド・ロートマンとの親交などを軸として論じられるのである¹⁴⁾。

次に、日本の大学歴史教育のなかでの学生たちによる研究の例を引いてみたい。福岡大学のドイツ史研究者星乃治彦は、学生の共同研究を推進してこれまでも豊かな成果をあげてきているが、その成果の一つを2013年に『地域が語る世界史』として刊行した¹⁵⁾。この本に結実した学生たちの研究は、「グローバル・ヒストリーと従来の地域史（地方史）を接近させ、地域の視点から世界史をみていく」ことをめざしている。それは三部から構成されており、第一部では、自分たちの住む地域である博多の歴史を世界につなぐ試みがなされ、博多港が近世における銀の流通の場になったこと、アジア主義者を通してアジアとの密接なつながりが存在したことなどが論じられる。第二部では、欧米における地域が対象とされ、たとえばスペインのカステイーリャとカタルーニャを素材としてスペインという国家のあり方を問い直す作業などが行われる。さらに第三部は、「大きな地域」を取り上げ、カリブ・ラテンアメリカ地域が大西洋にひろがるネットワークにいかに関わったかという問題などが検討されているのである。学生なりに真摯にグローバルとローカルの関連を問う姿勢がここには見られる。

一方、先にあげた『ローカルヒストリーからグローバルヒストリーへ』の具体的な成果はどうか。いささか厳しすぎる評価かもしれないが、野心的な目的にもかかわらず、その成果はナショナル・ヒストリーに回収されない形でローカル・ヒストリーを描くというところにとどまっているとの感がある。その限りにおいては十分成功しているが、そこからグローバル・ヒストリーにどのようにつながるかということが、筆者にはよく見えてこない。それは、この本の続編ともいえる『グローバル化のなかの日本史像』（岩田書院、2013）でも同様である¹⁶⁾。

最後に、筆者の研究についても触れておこう。近年筆者が取り組んでいる、ディエゴガルシアという小さな島をめぐる次のような研究である¹⁷⁾。

インド洋にあるチャゴス諸島に属するディエゴガルシアは、イギリス帝国領モーリシャスに属していたが、脱植民地化が進展するなかでモーリシャスの独立が日程にのぼってくる頃、冷戦下でインド洋の戦略的意味を重視しはじめたアメリカ合衆国軍部の関心を引くことになり、イギリスから貸与してもらおうための交渉が1964年から始まった。モーリシャス独立後もこの島をイギリスがアメリカに自由に貸与できる仕組みを作るため、モーリシャスの

独立に先だって、イギリス政府は65年にチャゴス諸島をモーリシャスから切り離し、インド洋イギリス領という新たな領土を作りあげた。その上で、アメリカへの貸与が取り決められたのである。その後、ディエゴガルシアにアメリカの軍事施設が作られる前提として、島の住民たちが強制的に退去させられ、モーリシャスやセイシェル、さらに一部は後にイギリスで、みじめな生活を送ることを余儀なくされることになった。ディエゴガルシアの米軍基地が拡充され、アメリカの世界戦略の要ともいえる位置を占めるに至った反面、島への帰還を望みつつけている元住民たちの願いはかなえられていないし、最近では、チャゴス諸島付近の海の環境を守るという大義名分が、住民の帰還を阻む理由としてあげられるようになってきている。

サンゴ礁から成る島というごく小さな地域の現代史、そこに住んでいた少数の人々（ディエゴガルシアはじめチャゴス諸島から放逐された人々の数は、1500人程度であった）の生活史に、冷戦と脱植民地化の絡み合い、インド洋海域をめぐるイギリスからアメリカへの覇権交代、アメリカの世界戦略、さらには地球環境問題をめぐる言説に隠された意味といったさまざまなグローバルな問題が映し出される、そのような研究として筆者はこれに取り組んできた。とはいえ、このテーマについての検討を始めた時、筆者はこうしたグローバルな視座というものをきちんと意識していたわけではない。グローバル研究センターの活動に関わったことで、それまでの研究についてこの視座を意識するようになったことを記して、歴史学におけるグローバルな視座についての試論を閉じたいと思う。

注

- (1) 水島司『グローバル・ヒストリー入門』（世界史リブレット）山川出版社，2010，pp. 2-4.
- (2) 上原専祿編『日本国民の世界史』岩波書店，1960；吉田悟郎『世界史学講義』お茶の水書房，1995など。
- (3) 木村礎「郷土史・地方史・地域史研究の歴史と課題」『岩波講座日本通史 別巻2 地域史研究の現状と課題』岩波書店，1994.
- (4) 『地域の世界史』全12巻，山川出版社，1997-2000.
- (5) 参照，木畑洋一「地域研究，地域世界と地域共同体」研究会「戦後派第一世代の歴史研究者は21世紀に何をなすべきか」編『21世紀歴史学の創造 別巻I われわれの歴史と歴史学』有志舎，2012.
- (6) 2007年夏学期における東京大学教養学部でのグローバル・ヒストリーについてのリレー講義紹介文より。
- (7) 水島司『グローバル・ヒストリー入門』p. 3.
- (8) 南塚信吾『世界史なんていらん？』（岩波ブックレット）岩波書店，2007，p. 45
- (9) <http://global.history.ox.ac.uk/>（2015年1月21日アクセス）
- (10) A. G. Hopkins, ed., *Global History: Interactions between the Universal and the Local*,

Basingstoke: Palgrave Macmillan, 2006.

- (11) 河西英通, 浪川健治, M. ウィリアム・スティーアール編『ローカルヒストリーからグローバルヒストリーへ』岩田書院, 2005.
- (12) 秋田茂・桃木至朗編『歴史学のフロンティア—地域から問い直す国民国家史観』大阪大学出版会, 2008.
- (13) 筆者の「開かれたナショナル・ヒストリー」論については, 参照, 木畑洋一「現代社会と歴史学の役割」東田雅博・安部聡一郎編『歴史学の可能性』(金沢大学人文学類歴史文化学コースブックレット1), 2012.
- (14) Wolf Schäfer, “Long Island: Global, National, and Local” *Long Island History Journal*, 21-1 (2009). <http://lihj.cc.stonybrook.edu/2009/articles/long-island-global-national-and-local/> (2015年1月23日アクセス)
- (15) 星乃治彦・池上大祐監修, 福岡大学人文学部歴史学科西洋史ゼミ編著『地域が語る世界史』法律文化社, 2013.
- (16) 河西英通・浪川健治編『グローバル化のなかの日本史像』岩田書院, 2013.
- (17) その概観が, 木畑洋一「覇権交代の陰で—ディエゴガルシアと英米関係」木畑洋一・後藤春美編『帝国の長い影—20世紀国際秩序の変容』ミネルヴァ書房, 2010である。